第 6 話：今日は僕が寄り添う日

昼間、突然お腹が痛くなって、トイレに籠ることになった。
誰も呼んでいないのに、アビイちゃんがそっと戸の前に座っていた。
ただ、待っていた。何も言わずに。
そのあと、私は季節外れのこたつに入って横になった。
アビイちゃんは、ずっとそばにいてくれた。
こたつの上にじっと座っていたり、ときおり私の足元に降りてきたり。
まるで去年まで、ぽーちゃんがしてくれていたことを、
今日は「ぼくの番」とばかりに、アビイちゃんが引き受けていた。

一方のぽーちゃんは、どこにも見当たらなかった。
夜になってふと、下宿している息子の部屋をのぞくと、
ぽーちゃんはそこで、ベッドの上に静かに横たわっていた。
「ニャー」と、小さくつぶやいてくれた。
もしかして、どこか具合が悪いのかな。
でも今朝になったら、元気に「ニャっ」と私を起こしに来てくれた。
たぶん、アビイちゃんに表舞台を任せて、
ぽーちゃんはぽーちゃんで、見えないところで一緒に"病んで"くれていたのかもしれない。
静かに、ちゃんと、私の不調と共にいてくれたのだろう。

そして、ビオラちゃん。
どこにいたのか分からないけれど、
私が少し元気になるとすかさず、「遊ぼうよ！」と誘ってくる。
この子は、いつでも変わらない。
元気で、軽やかで、メンタルが一番強い。
私たちのちょっと揺れる日常を、そっと支える、賢い末っ子。

三匹三様の猫たちが、
それぞれのやり方で、私の一日を受け止めてくれていた。

声も言葉もいらない。
ただ、そのぬくもりが、からだの奥に染みわたるようだった。